

2) イサザの産卵場所の分布特性

酒井明久・遠藤 誠

【背景】イサザは琵琶湖漁業において重要魚種のひとつであるが、近年漁獲量の減少が著しい。

【目的】イサザの増殖方法を考えるうえで産卵生態を知ることは重要である。イサザの産卵に適した環境を知ることおよび水域ごとの産卵場の評価を目的として、産卵床の密度と分布特性を調べた。

- 【成果概要】
1. 琵琶湖北端に位置する海津大崎で1995年3月24日から同年6月26日の期間に計13回、他の4水域（葛籠尾崎、沖島、近江舞子、八屋戸）では同年4月27日から5月10日の期間にそれぞれ1回ずつ調査を実施した（図1）。
 2. 調査は潜水目視観察により、湖岸から沖へ向けて底に固定したロープの両側1m以内のイサザ親魚の分布と産卵の有無を調べた。さらにイサザの産卵場をすみ場所とするヌマチチブの分布を調べた。
 3. 海津大崎におけるイサザの産卵床の分布には偏りがみられ、岸近くと沖合い方向の特定の場所に少ない傾向があった（図2）。産卵床の分布は水深とは関係なく、産卵に利用されていた大礫（64～256mm）、巨礫（256～600mm）の分布と対応していた。一方、ヌマチチブはほぼ一様に分布しており、イサザの分布と重なっていた。
 4. 産卵床の密度は水域によって異なっていた（図3）。海津大崎では、産卵は水温が10℃をこえた4月18日から6月12日までみられ、ピークは5月2日の6.0床／100㎡であった。他水域ではいずれも海津大崎よりイサザの産卵密度は低く、葛籠尾崎では1.5床／100㎡、沖島では0.6床／100㎡であった。近江舞子と八屋戸ではイサザの親魚、卵ともに確認できなかった。

【成果の活用】 今後は、①底質選択実験により産卵場所と底質との関係をより明確にすること、②産卵場において分布の重なるヌマチチブとの関係を明らかにすること、③水域間で産卵密度の異なる原因を説明することが必要である。

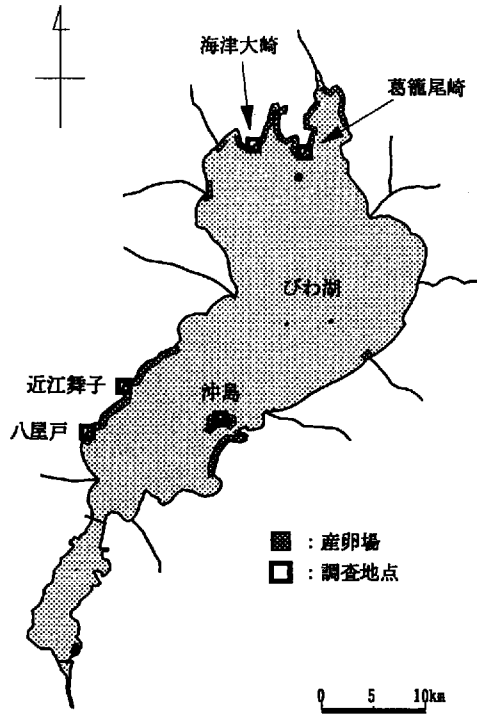


図1 イサザの産卵場と調査地点.

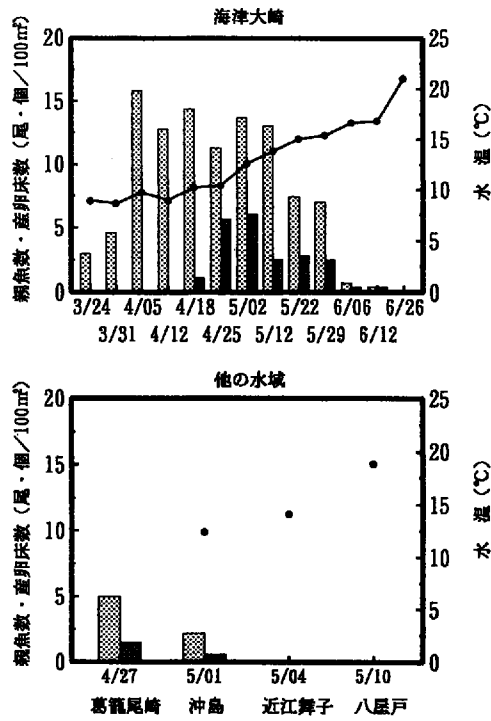


図3 イサザの親魚と産卵床の密度.

■: 親魚数, ■: 産卵床数

海津大崎の4/12までの親魚数および産卵床数は、調査時間30分当たりの数値.

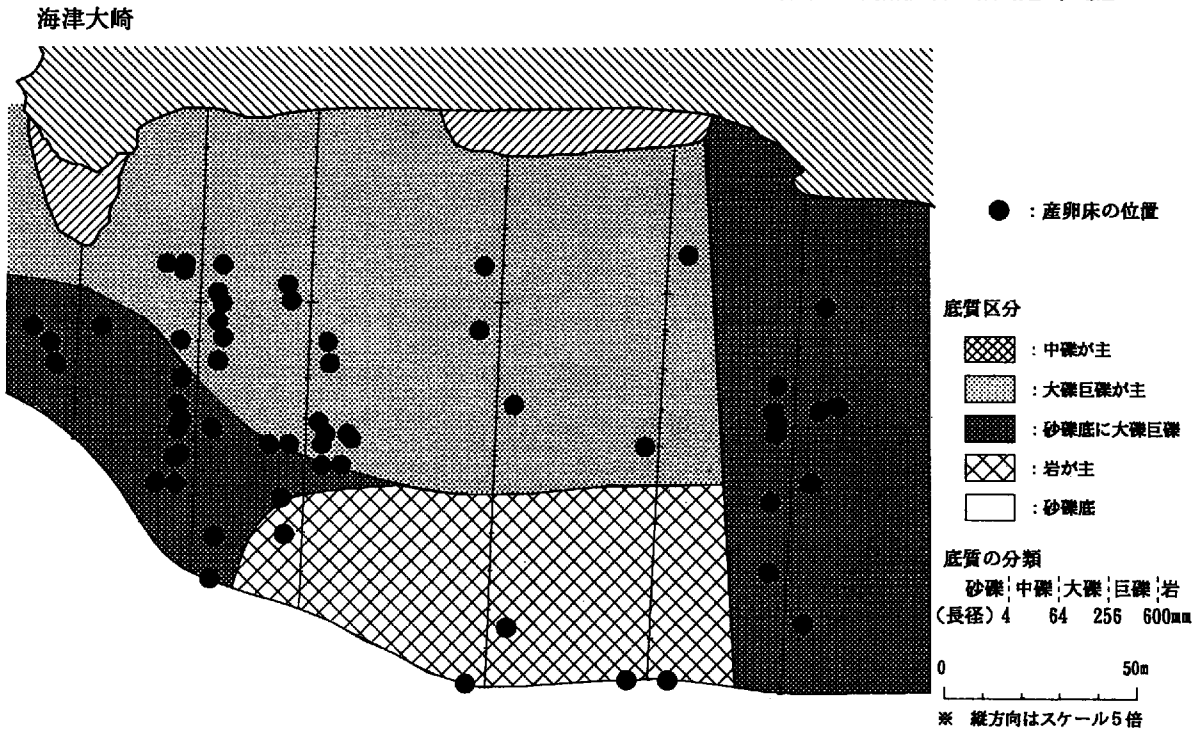


図2 調査期間中に観察されたイサザの産卵床の位置と底質分布図.